

点滴液の採血混入検知

弘大・野坂講師ら プログラム開発

弘前大学大学院保健学研究科の野坂大喜講師(45)らの研究グループは、点滴治療中の患者の血液検査の際に、血液に点滴成分が混入したことを検知するプログラムを開発し、9月下旬にイタリアで開かれた世界医学検査学会で「米国医学検査学会賞」を受賞した。野坂講師は「医療者の経験値に左右されずインシデント(事故になる可能性がある出来事)を防ぐことができる。世界中で安全安心な医療の提供につながれば」と話している。

(太田佳希)

米国医学検査学会賞 受賞

野坂講師によると、採血した血液への点滴成分の混入は、1病院当たり年間数十件は発生していると言われているという。もし誤った検査結果に基づいて治療が行われれば、大きな医療

事故につながるおそれがある。

研究では、自ら点滴を受け、採血し検査値の変化を調べた。その結果、点滴の種類や量にかかわらず点滴成分が混入した場合、同



米国医学検査学会賞を受賞した研究について説明する野坂講師

じような傾向が表れることが分かり、点滴混入を疑うアルゴリズム(計算手法)の開発につながった。

「医療現場で利用できる技術と評価してもらい、ありがたい」と受賞を喜ぶ野坂講師。「医療の安全は世界共通で解決しなければいけない課題だ」と話し、プログラムを広く利用してもらうために特許出願せず、各国に公開する考えだ。

野坂講師らは在宅医療の患者向けに、指先から自己採血し、ごく少量の血液で栄養状態を分析できる小型機器も開発し、併せて同学会で発表。これも高く評価された。

米国医学検査学会賞は、3人に贈られる優秀発表賞の一つで、東北地方の大学の研究者の受賞は初めてという。

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。